

試験時間

90分

注意事項 1 解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。

2 問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机の上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

こんにちは。声はこれで通っていますか。聴こえますか。
ご紹介いただきました福島です。自分の声がマイクに通っているかどうかというフィードバックができないのです。今のように声が聴こえているか確認しました。私は見えなくて聴こえないという障害をもっています。こうした重複障害者を盲聾者といいます。有名な盲聾者、アメリカのヘレン・ケラーさんが一番有名ですね。私とヘレン・ケラーはどこが違うかといいますと、障害を受けた時期が違います。彼女の場合、生後19ヶ月で盲聾の状態にいきなりなっています。私の場合は9歳で眼が見えなくなると、18歳で耳が聴こえなくなりました。盲聾の状態になって、コミュニケーションが難しくなりました。見えなくて聴こえないという状態がどんな状態かというのを少し想像していただくために、ご説明します。

(中略)

病氣のこと、患者のことについて、自分の体験をもとにお話ししましたが、ここで病氣が固定したものであることとしての障害について、少し考えたいと思います。

きょうのテーマである「治療されぬ者の視点ですが、これは病氣が治らなくて、結局その病氣が固定して、障害として残った場合、一体、障害というのはいくつ意味をもっているのか、という問いかけなので。

私の場合、最初、眼が悪くなったときは、小さかったので、そんなにショックではなかったと申し上げましたが、その後、耳が悪くなると、今度は非常にショックだったと申し上げました。そして、指文字という方法が見つかったけれども、最初は指文字なんて嫌で、耳が聴こえるようになるのではないかと思っていたとも申し上げました。

その後、20年たつて、今はどうか。もし今、私が聴力がかなりの程度改善するかもしれないという治療方法があったとして、^①それを受けるといって、随分考えるだろうと思います。例えば、実際に人工内耳という技術があります。うまく適応できた人の場合は、かなり聴力が回復して、電話での会話ができるようになったりする人もいます。だけど、私は恐らくそういった治療は受けられないだろうと思います。なぜなのか。別に人工内耳の技術がよくないと言っているわけではありません。人工内耳という技術、あるいはそれを使っての医療行為が救われてる人もいらっしゃるでしょうし、生活を豊かに送っている方もいらっしゃるだろうと思います。だけど、例えば人工内耳というのは、すべての人にとつてどんな場合でもよいものなのか、プラスなのかということを考えて、そう簡単には言えないのではないかと考えています。

なぜかという、私の例で言えば、私は20年間、指で聴く世界で生きてきました。盲聾者として生きてきたわけですが。これはいわば盲聾という世界、そういう文化の中で生きてきたとも言えます。そこで培ってきた友人、そこで培ってきた経験、私が得てきた社会的なつながり、そういうものがすべて、私の今の存在を形づくっています。もし仮にある特殊な治療法があって、私の聴力がある程度改善することになったとき、私はそれに飛びつくだろうかと。そう考えると、どうも私は否定的な答えしか思いつきません。なぜなのか。

もし私が聴力を今、回復したとしたらどうなるか。今申し上げた、私が指で聴いてきたもの、私が盲聾者として生きてきたもの、それらすべてを否定することになるのです。少なくとも生活スタイルがガラリと変わる。そのガラリと変わった生活スタイルが私にとつて果たして豊かなものなのか。私の人生にまつて素晴らしいものなのか、というところ、どうもそうは思えないわけです。

これはちょっと聴くと、変に感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、恐らく普通の方でも似たような経験をなさることがあると思います。例えば、山奥のすく不便な村で生活している人がいるとします。昔からそこに住んでいて年をとつた人もいます。あるいは都会の生活に疲れて、そういった山奥の生活に憧れた人もいるかもしれません。とにかく東京とはかけ離れた場所で、山奥の非常に不便なところで生活している人がいるとします。その人に対して「何でそんな不便なところにいるのか。東京に来たほうが便利だし、文化的な環境も整っている。何よりも快適に暮らせるじゃないか」と言ったときに、その山奥に住んでいた人が答える答え方にはいろいろあると思います。「都会で疲れたから、ここに来てるんだ」と言うかもしれないし、あるいは私にはこういった静かな生活、不便だけれども自然の中で暮らす生活がいいんだ」と言う人もいるかもしれません。

どうすればいいのか。では医療は要らないのかというと、そんなことは言いません。とても大切な行為だと思っています。ただ、中心が人間にあるのだということです。その人がもっている病氣の状態であるとか、障害の状態であるとか、そのものに意味があるのではなく、あるいは障害や病氣を軽減させるということそれ自体に意味があるのではなく、その病氣や障害が本人にとつてどのような位置にあるのか、本人にとつてどんな意味をもっているのかということを考えて、アプローチしていく。そうした人間を中心にする姿勢が大事ではないかと思っています。

〔出典：福島智「医と障害」治療されぬ者の視点―「医の原点」第3集 癒されぬ者からの視点〕

問一 この文章に二十字以内でタイトルをつけなさい。

問二 下線部①について筆者はなぜそう思うのか。その理由について二百字以内で述べよ。

問三 下線部②について、人間中心の医療とはどのようなものであるべきだと思うか、具体例を挙げてあなたの考えを八百字以内で述べよ。